

新発見の坂本龍馬の書簡（慶応3年11月10日 中根雪江宛て）について

1 本書簡を真筆と鑑定したポイントについて

- ・ 書状の内容が、龍馬の前後の活動に照らし合わせて整合性が認められる。
- ・ 書状の文字が、これまでの龍馬直筆の書状と照らし合わせた結果、龍馬のものと判断できる。
- ・ 龍馬しか使わない言葉や、龍馬しか知り得ない人との面会予定などが記載されている。
- ・ これまで使ったこともない表現、たとえば「三岡兄の御上京が一日遅ければ、新国家の御家計ご成立が一日遅れる」というような文言は龍馬以外には書くことができない。
- ・ 筆跡・内容ともに疑わしい要素は全く無い。
- ・ 以前発見された「越行の記」（慶応3年11月5日頃）と同じ文字（たとえば「三岡」「中根雪江」とか）を比較対照すれば同一人物の筆になることは疑いない。
- ・ 家族宛の書状に比べれば書体は綺麗で丁寧だが、越前藩の重役中根雪江に出すのであるから気を使って書いて当然である。中根にこの書状を出すということは松平春嶽に出すのと同意義とみれば書体の丁寧さは当然のことである。したがって墨消で訂正などは行わない。
- ・ 越前藩内において三岡八郎は藩内処分を受けていた身なので、簡単に京都の新政府に出仕させることは難しい状態にあった。そのために龍馬は極めて丁寧に繰り返して中根雪江に三岡の上京を依頼している。したがって筆跡も丁寧になるのは自然である。
- ・ 封紙とその内部の書状とのサイズのバランスもとれている。また書状には経年変化を示す自然な折れや多少のシミがあり、長く封紙につつまれていたことは明らかである。

2 本書簡の歴史的価値について

- ・ 三岡八郎を高く評価し、新政府に出仕させるため粘り強く根回しをしていたことがわかる手紙。
- ・ 龍馬は死の直前まで「新国家」の建設、とくに財政問題の解決に邁進していたことをよく示している（もちろん龍馬に死ぬつもりなどは全く無いが、日々、身の危険は感じていたはず）。
- ・ 龍馬と越前藩との関わりに関する研究が一層進展するはずである。
- ・ また越前藩重役で松平春嶽侯側近の「中根雪江」という人物の歴史的役割がより明らかになってくるはずである。
- ・ 今後の幕末史研究・坂本龍馬研究の進展が期待できる重要な史料である。

3 本書簡の内容について

- ・ 封紙の名は「才谷樞太郎」。書状内は「龍馬」である。
- ・ 宛先は京都岡崎の越前藩邸に到着したばかりの越前藩重役の中根雪江（なかねゆきえ・なかねせっこう）である。
- ・ 日付は「十一月十日」であるが、もちろん慶応三年十一月十日のことである。
- ・ 龍馬は京都を10月24日に発って福井に向かった。28日に福井到着。福井で三岡八郎と長時間話をしたあと、11月3日に福井を発ち、5日に京都へ戻ってきたところである。（その直後に三岡を新政府に推薦する「越行の記」（後藤象二郎宛）を京都で書いた）
- ・ 松平春嶽は11月2日に福井を発ち、11月8日に京都に到着。中根雪江は遅れて11月5日福井を出立、8日頃入京か。
- ・ 内容は上京してきたばかりの中根雪江に「春嶽侯の上京に中根が尽力してくれたお礼を述べるとともに越前藩士三岡八郎の新政府出仕について重ねて懇願するもの」である。
- ・ 内容は3年前に出現して話題となった「越行の記」の続きとすることができる。
- ・ 「越行の記」とこの新出書簡をみると龍馬はすでに福井で中根雪江に会っていたはずである。
- ・ 新国家の建設に財政担当者として三岡八郎が適任なので越前藩内の手続きを進めて、ぜひ出

してほしいと強調している。

- ・ ただし、三岡八郎は文久三年以来、藩内で処分にあってきた状況であったのでその状況を分かったうえで龍馬は重役の中根雪江に（越前藩の三岡上京の）「御裁可」が下りるように懇願している。
- ・ 「新国家」という言葉が使われていることがとても重要。龍馬の他の手紙では見たことがない。用語用法の成立についての検証は必要だが、その概念は素直に「新国家」としてもよさそうである。
- ・ 「三岡兄の上京が一日遅ければ、新国家の御家計（財政）の成立は一日遅れる」、との表現が文章として面白い。
- ・ 龍馬は11月はじめに福井で会った中根雪江に三岡八郎の新政府出仕を直接申し込んだらしいが、その際の中根の返事ははかばかしくなかったことを推察させる。そのため上京直後の中根に再度、三岡の上京を越前藩として許可するようにこの手紙で頼んでいる。（中根に手紙を出すことは春嶽に出すのと同じ意味であろう）
- ・ 文末に近いところで、明日に幕臣永井玄蕃頭（永井尚志）に面会する予定だという話は、龍馬の11月11日付の林謙三宛ての手紙に「永井に面会した」と書いてあるので、時間的にもきちんと符合する。
- ・ この書簡が150年も出てこなかった理由は、封紙に付箋があり、そこに朱書で「坂本龍馬先生遭難直前の書にて他見を憚るものなり」とあるからであろう。明治時代のいつかの段階でこの手紙は人に見せてはいけない、との判断がなされていた。
- ・ 福井市立郷土歴史博物館の角鹿尚計館長は封紙上の付箋の朱書は中根雪江であろうと推定されている。（筆跡のみならず、「坂本先生」と記しているところも身分よりも人物を重んじた雪江らしい敬意が表現されているものとする。なお、当時他の藩でも国外（藩外）の士に対して、「先生」という敬称を用いた例はある。）
- ・ 三岡八郎の京都到着はこの1ヶ月も先の12月半ばのことであり、この間のタイムラグには様々な理由があったと思われるが、越前藩内に三岡八郎の新政府出仕に反対するもの（中根も含まれるか）の存在が推察されるために「他見を憚る」可能性が考えられる。（特に三岡八郎に知られるのは良くないはず。また別の意味、たとえば龍馬暗殺に関わる何かが書状にあった可能性も考えられる。）
- ・ 越前藩の松平春嶽の上京は土佐藩の山内容堂・後藤象二郎や龍馬らの推進する大政奉還建白書に基づく公議政体論推進派には大きな追い風になったため「千万の兵を得た心持ち」と書いたであろう。
- ・ 永井玄蕃頭（永井尚志）は徳川慶喜側近であり、幕府の有力者であるがその永井と「談じたき天下の議論がある」と書いたところに大政奉還後の坂本龍馬の活動の重要性がよく表れている。おそらく新政府における徳川の関わり方の問題であろう。